

天皇制に対しての日本人の意識

ワーリ・クレア

1. 天皇の特殊な存在

世界で日本の天皇は、特殊な存在である。歴史的に見ても国家の中軸としてのヨーロッパの君主と日本の天皇は随分違う。ヨーロッパの君主はほかの国の王室の人とよく政略結婚していた。ヨーロッパでは中世戦争のあいだに君主はよくかわり、一つの君主が続くことはほとんど無かった。一方日本の天皇は存続的な存在と考えられている。ある65才の日本人女性は次のように述べている。「日本的な文化の継承者としての存在価値は大いにあると思う。」また22才の男性は「天皇制（象徴として）は機会ではなく、歴史的遺産である。」世界では日本の天皇のように直系の子孫が継承してゆく事は珍しい。44年前までは天皇は神様としてあがめられていた。

2. 昭和天皇

昭和の裕仁天皇は1901年4月29日に東京で生まれた。1921年欧州訪問後、20才で摂政に就任した。1926年12月15日に病死した父親の大正天皇にかわって即位した。戦争中には日本ですべての軍事行動が天皇の名において行われている。1945年8月15日まで『現人神』として君臨した。その日、天皇はラジオで『終戦の勅語』を読み上げた。戦後、新憲法のもとで、『象徴天皇』に生まれかわった。

天皇陛下は昭和64年1月7日に崩御された。その時、昭和時代は幕を閉じ、平成時代という新しい時代に入っていった。御病気の際に、また崩御の際に天皇と天皇制について報道され、同時に多くの本が出版された。そしてそれまでしられていなかった天皇についてのことが数多く公表された。とくに戦争責任についての議論はその中心となる場所である。アメリカの国務次官ジョセフ・グルーは次のように言った。「天皇はいずれにせよ、戦争責任を免れることは出来ない。開戦の詔勅にサインしたことにより、その責任は、十分にその肩にのしかかっている。」戦争中、国民にとって天皇陛下は御顔を直視することさえできないほどの神のような存在と考えられていた。神風特攻隊は日本の軍隊の狂言的なやり方のために無惨にも若くして亡くなっていった。天皇の名前のもとで公民権が侵害されていたし、日本は世界の強国だと教え込まれていた。戦争中に日本人は天皇制に、すでに多大なる影響を与えられていたと明示されている。ところで、現代の日本人は天皇制にたいしてどのような意識をもっているのだろうか。

3. 天皇制に対しての日本人の認識

1988年10月から1989年9月まで、天皇制にたいしての日本人の認識を勉強した。その間に天皇が交代し、『平成』という新しい時代にはいっていった。この時期は日本にとって歴史のひとつの節目だと思う。次にあげるものは、天皇陛下の崩御の際に行った京都での研究にもとづいている。東京、大阪、そして広島で天皇制について様々な世代300人からアンケート調査を行った。新聞、雑誌の記事とテレビのニュース、関連した番組とともに次のような意見があげられている。アンケートの質問は以下の8つである。

①日の丸をみたときに何を感じますか。

30%の国民は「日本人の象徴です。」と答えた。そしてその連想は「国家である」「日本の国民である」「日本人として誇りを感じる」「日本の国家を守る」「日本国のアイデンティティ」などである。20%は「戦争と関係がある」という意見を述べている。例えば「常に戦争や軍国主義のイメージがつきまとう」「特攻体」「アジア諸国への侵略を思い嫌悪感があるが、あの丸は血である」という連想があげられている。15%は「日の丸弁当をおもいだす」と答えた。(この場合、3分の2は中学生である)14%は「オリンピックで日の丸があがると感動する」とも答えた。12%は「日本の国旗はシンプルで美しい」という意見を述べたが、5%は「かっこわるい」「シンプルすぎてイギリスの国旗に比べて日の丸は地味で不細工である」という印象をもっている。4%の人は「親しみ」を持つと述べているが、つまり安心感を感じるということらしい。3%の人が祝日を思い浮かべている。1%の人(60才以上)は「緊張する」と述べた。5%の人は「わからない」と答えた。

日の丸にたいしてのこの意見での一般的な結論を述べると、過半数の国民は一方で愛国心を感じるが、他方で戦争の軍国主義とアジアの侵略も感じている。愛国心と軍国主義はなんとなく結ばれているのではないだろうか。

②君が代が歌えますか。またその歌詞の意味がわかりますか。君が代を歌うとき抵抗を感じますか。

この質問については、60%の人が抵抗を感じることもないが、歌うにしても意味はわからないと答えている。表面的ではなんとなく意味は分かっても、真意はよくわからないので新しい国歌が欲しいということらしい。21%の人は(ほとんど60才以上)真意も理解できるし、抵抗も感じることなく歌うことができる。その他19%の人は君が代を歌うことに対して抵抗を感じている。「主権在民という憲法の大原則から外れているし、国歌を歌うことを強制されているときはとても抵抗があり歌いたくない」という反感的な意見もあった。過半数の人がもっと意味の分かる現代的な国歌を望んでいることが分かった。

③天皇が崩御されたとき、なにを感じましたか。

予想していた通り、この質問には様々な意見をきくことができた。多くの人は『昭和の終わり』を強く感じたということであった。66才の男性は次のように答えている。「長い間の御病気だったので、安らかに、安楽に、と祈っていたがそうなられたようなのでほっとした。しかし激動の昭和が終わったとおもうとなんとなく淋しい感じであった。」このような意見をもっている年配の人々の多くは『平成』という時代に対して少々不安があるらしい。例えば57才の茶道の教師は「また一步明るく時の流れを期待しているが心配もし……」と消極的に答えている。天皇の崩御とともに自分の歴史を振り返り、特に戦争のことを考え、あつい思いで新しい時代を迎えた人もたくさんいることを知った。昭和天皇とともに人生を歩んできたという感で一杯の人が年配の人の中にはたくさんいることをもした。しかし戦争のことに触れると非難的な意見も多く見られる。ある66才の女性は「責任を謝罪しないままだった」と怒っている。また11才の男の子と48才の男性は天皇陛下の大葬の儀にかかった予算について「無駄な税金がつかわれていることが残念に思う」と不満をもらしている。これらの意見から、全体的に、天皇の崩御にたいしての反応は年齢層によってまちまちであるといえるであろう。

④ 天皇が御病気のとき何か自粛しましたか。

アンケートによると10%の国民しか自粛しなかった。しかも、その大半は戦前に生まれの人である。70代の人二人は「自粛したいと思った。」と述べた。天皇が御病気のときには日本中自粛のムードが漂った。例えば、お祭りやコンサートは中止されたところも多かった。しかし個人個人の自粛意識はどうかといえば、余り無かったと見られる。

⑤ 天皇崩御の際のテレビ番組放送変更をどう思いますか。

40%の人が「当然だと思う。」と答えた。37才の女性は「一つの時代に対するケジメとしてはやむを得ないが内容に問題がのこった。」と憤慨していた。一般的な意見は、天皇に関する番組は行き過ぎだが、半分ぐらいはやむを得ないということであった。10人の人はテレビ局の良識を疑ったというような失望を感じていた。ある23才の男性は各テレビ局に抗議の電話をいれるほど腹を立てた。その日のテレビ番組は面白くなかったのでレンタルビデオの店におおくの人が並んだという現象は若い世代の無関心さを物語っている。

⑥ 天皇家に敬語をつかうことに抵抗を感じますか。

45%の人は、日本では目上の人に敬語を使うので、抵抗を感じないと答えた。この3分の2は年配の人である。一方若い世代は半分の人が抵抗を感じると答えた。8%の人が平等でなければならぬので敬語を使うことに抵抗を感じるという意見をもっている。

⑦ 天皇に戦争責任があるとおもいますか

1988年12月10日に本島長崎市長は天皇に戦争責任があると公表した。それまではこのような議論はタブーであった。その時から国民の間でもこの問題について考えられ始めた。

評論家の児島襄氏はその著『天皇と戦争責任』のなかで次のようにのべている。「国内の一部に天皇の戦争責任を追求する声はある。しかしその戦争責任は開戦責任を指すのか、戦禍をもたらした敗戦責任をいうのか、それも双方を対象にするのかははっきりしない。」

この質問にたいする答えの統計からみると15%の人は「責任が全く無い」と答えた。40%の人は「半分はあるとおもう。」と答えているが、これは個人的にはないにしても、天皇としての立場として考えられ、軍部の言いなりにならざるを得なかったということからなのであろう。35%の人が「責任がある」と答えているが、その半分は戦争体験者であった。6%の人が「おそれおおく考えたくない」という意を表した。63才の男性は「あるといえは気の毒、ないといえは国際的には通用しにくいのでは。」と、不安を見せた。

児島氏は「一般の米国民にとっては天皇はナチス、ドイツのヒットラー同様に『血に飢えた軍国主義者の統領』と見なされている。」と書いている。米国民の77%の人が天皇の処罰を要求している。戦争が終わったとき、中国は「日本人戦争犯罪人第1号」と激しい語調で主張した。天皇の大葬の儀の時、英国皇太子は代表として参列することを決めたがそれに対し多くの英国国民は反対した。東京裁判で天皇はなぜほかの戦犯とともに裁かれなかったのだろうか。その上、天皇はアメリカのマッカーサーと会見されたときに戦争中の出来事責任をひきうけられると述べられた。しかしマッカーサーの見解では日本軍を無条件降伏させるためには天皇が必要であった。マッカーサーは次のように説明していた。「日本人、そして恐らくは日本軍が喜んで従う唯一の声は天皇の声である。言い換えれば天皇は数万人の国民の命を救う源泉である。」

④天皇の存在についてどのように考えますか。

毎日新聞の世論調査によると1989年に天皇にたいしての尊敬の念は5%まで上がったとある。このアンケート調査からも色々な意見をきくことができた。41%の人が「民族の象徴として制度は残ってもよい。」と答え、33%の人が「関係がない。」と答え、16%の人が「廃止してもよい。」と答え、10%の人が「存続すべきである。」と答えた。もっと開かれた天皇家であって欲しい、同じ人間であるのだからもっと近い存在で考えたいという意見が多かった。もっと外向的な仕事をしてほしいという意見もたくさん見られた。ある25才の女性は次のように述べている。「天皇制は長い間続いてきたもので、自分は天皇にたいする教育を受けていない世代ではあるが、何かしら尊敬の念、愛を持って見守っていることは、すばらしいことで国民の象徴として続いてほしいと思う。」20代の人々の多くは「日本の象徴として平和に貢献してくれればよい。」と答えている。60代の人々のなかで10人は「国際社会にあう日本のためには何時の日にか無くなってしまった方がいい。」といい、35%の人が「アジアの国々に謝って欲しい。」と強く望んでいる。「天皇制を廃止すべき」という意見をもっている人の半分は国民の差別問題について深く考えている。いわゆる「人の上に人をつくる」ことがすべて差別につながるのであるが、新憲法で『天皇制』という身分差別を残してしまったのである。ある24才の女性は「天皇制があるかぎり被差別民衆は再生産される。」と述べている。天皇制反対派のおおくは「全面廃止はいまは無理で、はがゆい気持ちである。」というような意見を述べていた。アンケートの統計から考察すると、30%の人が無関心、25%の人が賛成、あまり関心がないが戦争責任があ

ると考えている人が20%、徹底的に反対している人が17%であった。70才以上の人の中にはおそれおおくて答えたくないという人も3人いた。賛成している人の88%は50才以上である。無関心の人60%は学生、33%は40-50代、7%は60才以上の人である。一方反対している人のなかで40%は40-50代、39%が学生で、21%が60才以上の人である。このことからいえることは、60才以上の人なかで88%の人は賛成しても21%の人は抵抗があるということである。戦争を知っている世代の人は戦争に関して感慨深いものがあるらしい。この点で、戦争体験者の場合、天皇制と戦争とは密接な関係があるという印象を持った。

4. 最後に

このアンケート調査を通して興味を持ったことは世代によって天皇に対する意識が違ふということである。年配者は、戦前教育の中で天皇を神と信じ、一方、若い世代はほとんど関心を抱いていない。教育の与える影響の大きさというものを痛感した。これからの時代をつくっていく若い世代にももっと関心をもってほしいと思う。